

Title	私とドイツ文学科
Sub Title	Das Germanistische Seminar und ich
Author	黒岩, 純一 (Kuroiwa, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.365(8)- 372(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集#目次のタイトル: ドイツ文学科と私
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0372

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

私とドイツ文学科

黒岩純一

唯なんとなく英語がすきで英文科進学を考えていた私に小村実先生から、独文へこないか、とお声がかかった。この一言で私はあっさり独文科へ進むことを決めた。昭和30年のことである。特に熱心だったわけではないが、慶應外語に通う程度にはドイツ語がすきだったので、別に抵抗感はなかった。

その頃は理事であった哲学科の橋本孝先生や、文学部長松本芳夫先生等が独文科修士課程の開設のため奔走されていたときで、小村先生としては一人でも多くの学生を独文科に勧誘しようとされたのであろう。しかし私たちはそんな事情は少しも知らなかった。ただ進学してわかったことは、こうして独文科へ集められた仲間が他に何人もいて、必ずしも成績が良いからという理由で誘われたわけではなかった。古い仲間が集まると、いまでは笑い話である。

結局、修士課程は昭和31年に開設された。第一期生は、稲田拓さん、菊池慎吾さん、森田茂さん、村田牧人さんの4人だったはずである。この年、東大を停年退職され、慶應へ移られた相良守峯先生は博友社の「大独和辞典」の出版のため力を注いでおられた頃で、その完成（昭和33年）後も同じ博友社の独和（俗にいう木村・相良の）辞書の改稿に専念しておられた。我われ学部生も大学院の先輩がその仕事に忙殺されていることを聞き知っていた。

この頃の独文科の授業は相良先生、成瀬無極（清）先生、小村実先生、村田碩男先生、大野俊一先生、尾崎盛景先生等が担当しておられた。また

法学部の一瀬恒男先生（ドイツ詩）や商学部の渕田一雄先生（ドイツ語学）も文学部に出講しておられた。尾崎先生の授業では関口存男編「新ドイツ文法教程」がテキストになった。私が三年生のときは、その関口先生が「ファオスト」を講じておられた。私は四年生での履習を予定していたが、翌年、関口先生は授業を担当されず、これだけはいまも悔いが残る。当時すでに学部生の間でも関口先生の名は伝説的であった。ずっと後のことになるが、前期の渕田先生が「ファオスト」I部664行の和訳に関してこれまでの翻訳に疑問を投げかけ、搬動詞の解説を試みられたことがある。（「ドイツ語研究」第11号、三修社）ある集りの席でこのことが話題になったとき、先生が「関口文法を勉強していれば、すぐにわかることです」と事もなげに言われた言葉が私の胸に残っている。

私が三年のときは相良先生は「ドイツ語学概論」（研究社）や文学史を講義しておられた。この文学史は一年後、角川書店から三冊本で出版された。四年生では「ファオスト」I部を聴講した。成瀬先生のドイツ文学史は二年生の必修であったと思う。すでにご高齢であったので、授業前には学生の代表が塾僕室（いまでいう用務員室であるが当時はこんなよび方がされていた）からお茶を運び、教卓の上に乗せておく習わしだった。若いときはゲーテよりもシラーを読みなさい、と言われた先生のお言葉が印象に残っている。ゲーテ協会の集まりで先生がシラーのドラマの一節をドイツ語で演じられた話を後年、どなたかの随筆で拝見したことがある。先生は新劇の指導をされたことがあり、もともと情熱的な文学青年であつたらしい。教室でドイツのドラマや小説の解説をしながら、平生高い声がいちだんと高くなることがあり、そのときばかりは若き日の成瀬青年を髣髴とさせる迫力があつた。しかし成瀬先生も小村先生も我われが学部生の間には相次いで亡くなられた。小村先生はあるとき授業前に、買ってきたばかりという喘息治療の器械を大事そうに鞆から取り出されて我われにみせられたことがある。先生が永年喘息に苦しんでこられたことを私はそのときはじめて知つたのである。

2年間、映画会社に勤務した私はその後、大学院を受験し再び学校に戻

った。昭和35年のことであった。その年は相良先生の中世語、大野先生の『ヨーロッパ文学とラテン中世』（クルティウス）、塚越敏先生のリルケ、学習院大学の桜井和生先生のベハーゲル、シンチンガー先生のニーチェ等を受講した。シンチンガー先生は極端な近視で、ご自分でテキストをお読みになることは殆どなく、説明のために引用されるドイツ語の詩はすべて暗記しておられた。

難解だったのは塚越先生の実存主義によるリルケ解釈で、先生の質問に答えられず、一週間自分なりの答えを用意して教室へ出るのであるが、やはり理解できていないらしい。どうもその繰り返しであったように思う。

大学院進学までの2年間のブランクをカバーするため、更に勉強したいと思った私は博士課程への進学を申し出た。先生方も進学希望者を待っておられた様子で、なんとか許可され、私が博士課程の第1号となった。しかし、そのためすでに授業を担当しておられた宮下啓三さんまで博士課程の授業に出なければならなくなってしまったことは、とんだとぼっちりで、このことはいまも申し訳なかったと思っている。ここでは相良先生のもとで学部時代の「ファオスト」I部につづいてII部を2年がかりで読むことになった。また大野先生のもとで難解と言われるジャン・パウルの短篇をいくつも読んだことは大きな収穫であった。副文章や挿入文が多く、また百科辞典的な該博な知識のつまった文章も慣れてくると面白かった。

博士課程を終えた年、私は助手として三田で7コマの授業を担当するようにいわれた。経験不足であったので、日吉の授業を担当することはまだ許されなかった。その頃、すでに中田美喜先生は経済学部から文学部に移籍されており、学生との交流も次第に活潑になっていった。独文科の和気藹藹とした伝統はこの頃培われたように思う。新入生歓迎会や忘年会の他、奥多摩や三浦半島へのバス旅行、また伊豆方面への宿泊旅行なども盛んに行われた。宿では遅くまで歌やダンスに若さを発散させた。しかしダンスの主役は相良、大野両先生であった。相良先生はドイツでダンス教師について習ったという本格派であり、ワルツがお好きであった。大野先生もまた上海仕込み(?)のタンゴを颯爽と披露された。

しかし間もなく慶應にも停年制度が導入され、両先生は相次いで退職された。しかし昭和45年には東大から岩崎英二郎先生、そして5年後には村田碩男先生の後任として七字慶紀先生をお迎えし、独文科の基礎も盤石となった。

しかしすべてが順調に経過したわけではなく、昭和61年11月には尾崎先生を癌に奪われるという不幸に見舞われた。私にとって尾崎先生は学生時代から永年お世話になった先生であり、研究室も一緒にさせていただいた。しかし学生と共に鎌倉の病院へ献血に通ったことも先生の体を回復の軌道にのせることはできなかった。ご葬儀の日、青く澄んだ空を薦がときに啼きながら大きく旋回していた。病苦を一度も訴えられたことのない強い方でした、という病院長の言葉に私はわずかに慰められた。

その後、ラルフ・シュネルさん、平尾浩三さんをお迎えして悲しみも薄らいだと思われる頃、またしても大きな不幸に見舞われたのである。平成2年、IVGの年、大会実行委員長であった中田先生が学会を目前にして同じように癌で逝かれたのである。この年、研究休暇をとることになっていた私は世界のゲルマニストを迎えるこの学会運営にどれほど周到な準備とエネルギーが必要であるかをまだ認識していなかった。漸く理解したときはもはや休暇の返上もならず、学会期間中、ただうろうろと雑用のお手伝いをしただけであった。その後、大会準備のため事務的作業を取り仕切っていた経済学部島田勝さんまでも亡くなられたことは痛恨の極みであり、私の自責の念は強まるばかりである。

しかし岩崎英二郎会長をいただいたこのIVG大会はこれまで例をみない550をこえる研究発表を集め、暑い最中ではあったが大成功に終わった。内外のゲルマニストに強い印象を残しただけでなく、若い先生方や大学院生に与えた刺戟ははかり知れない。

最後にドイツ人講師について触れておきたい。詳しくはドイツまで出掛け、人選にあたられた方々にお聞きすべきことであるので、ここでは簡単に紹介しておきたい。

これまでフォルカー・ヘッチ、コールハンマー、モースミュラー、レー

ケンさん等、学問的にも人間的にもすぐれた訪問講師、また非常勤講師に恵まれてきたが、平成3年、前記のラルフ・シュネルさんを改めて専任スタッフに迎えて以来、ドイツ人専任教授の道もひらかれている。現有スタッフについてはここでは敢えて触れないが、最近は塾を訪問するドイツの詩人、学者もふえ、朗読や講演を通じて肉声に直に接することは確実に我われに強い刺戟剤として作用している。

ドイツ文学科のますますの発展を期待して已まない。

付記

このたびこの文章を書くにあたり、不明の点を小名木榮三郎先生にお伺いしたところ、早速ご返事をいただいた。先生は我われのまったく知らない戦後間もない独文科の姿を詳しく書いて下さり、『ゲョエテ研究』（昭7）で世に知られた茅野蕭々先生について、また金田廉先生（美学）、守屋謙二先生（美学）の塾監局内の小部屋における授業風景についても書き送って下さった。厚くお礼申し上げますと共に、別の機会に全文をご紹介できればと考えている。

履歴・職歴

昭和9年7月31日 東京杉並区生れ

- 22年3月 杉並区立第二小学校卒業
- 25年3月 杉並区立松ノ木中学校卒業
- 28年3月 都立豊多摩高等学校卒業
- 33年3月 慶應義塾大学文学部独文科卒業
- 33年4月 大映株式会社入社, 35年2月退社
- 35年4月 慶應義塾大学文学研究科修士課程(独文)進学
- 37年3月 同課程修了
- 37年4月 同大学院博士課程進学
- 40年3月 同課程単位取得退学
- 40年4月 慶應義塾大学文学部助手
- 40年10月 慶應義塾外国語学校講師
- 45年4月 文学部専任講師
- 46年4月 文学部学習指導主任(日吉)
- 47年4月 日吉高等学校兼任講師
- 48年4月 福沢基金留学(オーストリア・ドイツ, 50年帰国)
- 50年4月 文学部助教授
- 51年4月 語学視聴覚研究室委員
- 52年10月 通信教育部学生部副部長
- 56年4月 文学部教授
- 56年10月 文学部学習指導主任(日吉)
国際センター学習指導主任(日吉), 交換留学生委員会委員
- 58年10月 文学部日吉主任 大学評議会委員
- 平成2年3月 特別研究期間(3年3月19日まで)
- 12年3月 慶應義塾大学を停年退職

業績表

論文

- カフカの『変身』における基礎的問題点 芸文研究19号, 1965
- カフカの『城』——測量師 K の闘い 芸文研究26号, 1968
- ユダヤ人の排斥とカフカ 芸文研究31号, 1972
- カフカと「自衛」紙 ドイツ文学58号, 1977
- カフカと“Hyperion”誌 芸文研究36号, 1977
- カフカの作品における自伝的要素 芸文研究41号, 1980
- カールスバートの決議とその前後 芸文研究43号, 1982
- 若きカフカ——初期の手紙と文学の実習 日吉紀要ドイツ語・ドイツ文学4号, 1987
- カフカとシオニズム 芸文研究52号, 1988
- カフカのアフォリズム (1) 芸文研究60号, 1992年
- カフカのアフォリズム (2) 日吉紀要ドイツ語・ドイツ文学16号, 1993
- カフカのアフォリズム (3) 日吉紀要ドイツ語・ドイツ文学17号, 1993
- フランツ・カフカの『判決』 教養論叢96号, 1994
- 手紙にみるカフカの『変身』 芸文研究67号, 1995
- カフカの『審判』——罪もしくは罪の意識 日吉紀要ドイツ語・ドイツ文学28号, 1999

翻訳・編著

- 教科書 ヤノーホ：カフカとの対話 南江堂, 1967
- 教科書 プレヒト：肥ったソクラテス (中田美喜氏との共編) 同学社, 1967
- Fukuzawa Yukichi——Eine autobiographische Lebensschilderung 独訳参加 慶應通信, 1971
- 教科書 ムシル：グリージア (中田美喜氏との共編) 文林書院, 1972
- [Kafka-Rezeption] In Japan. In: Kafka-Handbuch II, hg. von Hartmut Binder, Kröner Verlag, 1979
- 慶應義塾大学通信教育教材 ドイツ語 第四部 (共著) 慶應通信, 1988

解説・随想他

- 文学の学び方 三色旗, 1970
- ウィーンとユダヤ人 ベリひて14号, 1973
- ウィーン雑感 三田評論1月号, 1974
- 海外事情——思い出の家族 三田評論, 1975
- 座談会 ユーモアについて 三色旗, 1977
- プロマイド?プロマイド? 三色旗, 1978
- ドイツ文学——カフカ 日本短波放送, 1978
- 私と東独の旅 慶應通信378号, 1979年
- カフカ——文献探しの思い出 Brunnen Nr. 255, 1983
- 世紀転換期のプラハの状況 基礎ドイツ語8号, 1983
- カールスバートの決議 ベリひて25号, 1984
- カフカ——作品と背景 三田評論8・9月号, 1984
- 文学のふるさと——カフカとプラハ 基礎ドイツ語6号, 1984
- 異国に咲くカスターニエン ラテルネ59号, 1988
- 卒業論文作成の技術 三色旗2号, 1989
- 最近のカフカ研究 塾159号, 1990
- ドイツ語の学び方 『学習のすすめ』に掲載(慶應義塾大学通信教育課程補助教材), 1966